

# 天台四教儀大要

藤岡柳風

余前きに諦觀録を學び其の講の了れるや其が大要を綴りおせるもの則ち之あり。内容頗る貧弱にして寧ろ汗顔に堪え難きものおれど一讀其の貢獻する所あらば余の幸福之に過ぎず。讀者諸彦、乞諒恕。

## 第一章 總叙

凡そ天台大師釋尊一代五十年の聖教を判釋するに五時八教を以てす、始めに略して名目を辯せば五時とは一に華嚴の時、二に鹿苑の時、三に方等の時、四に槃若の時、五に法華涅槃の時なり。次に八教とは藏通別圓の化法の四教と頓漸秘密不定の化儀の四教との八教あり。この五時八教を用ひて一代の教法を判釋するに毫も漏す所あきなり、故に文に、以三五時八教判釋東流一代聖教盡無不盡と又頓等四教是此宗判教大綱と云ひ、藏等四教是一家釋義綱目と云ふ。

さて華嚴の時は佛成道して最初佛の悟のまゝを説けば頓教にして、佛二乗の小機を擬宜せんが爲あり、所説の經別おきが故に經題に従て時の名を立つ三七日の間圓教を正意として兼て別教を説く故に兼と名くるなり、鹿苑の時は二乗を誘引して小果を得せしむれば漸教なり、この鹿苑と後の方等槃若との三時は佛小機をして漸次に一佛乘に入らしめん爲の化意なれば、共に漸教なり、而して此鹿苑の時は初漸なり、所説の教名も同說處も同なれば、最初の處に従て時の名を立つ、但淺き藏教のみを説く故に但と名くるなり、次に方等の時は己に小機小乗の法を知れば、耻小慕大せしめんが爲め、三藏教に對して通別圓の三教を説けば對と名く、十六年間說處も所説の教も同なれば廣く四教を説き等く衆機に被ると云ふ所より時の名を立つ中漸なり、次に槃若の時は二乘大小各別ありと思惟すれば、小をして大に通せしめんが爲の説なれば漸教にして后漸なり。十四年間四處十六會の説なれども所説の經名別ならざるが故に

經題に從て時の名を立つ始終通別の二教を帶して圓教を説けば帶と名く、次に法華涅槃は共に所説の經名別なきが故に經題に從て時の名を立つるなり、法華の會座に於ては小機の二乘を佛自証の極理に入らしむるなり、八年間二處三會の説にして圓教のみ説いて前四時を開會して一乘の妙と成さしむ、故に純と名くるあり。涅槃は佛サ滅後に垂として一日一夜に説き玉ふ前番法華に於て未だ機根の熟せざる者の爲と末代衆生の惡見を防がんが爲に更に四教を説く故に雜なり、されど法華と涅槃とは其旨別なきが故に二經を合して一時とせずなり。

不定教と秘密教とは共に前四時に於て説く、法華涅槃は大小の機調ふが故に不定教も秘密教をも説くことを用ひざるなり、故に非頓非漸非秘密非不定とは名く。

次に涅槃の四教と方等の四教とは、四教の名は同じなれど義別あるを以て分つ、即ち常住を知ると知らざるとなり。

又化儀の四教は化を設る始終の組み合を分くれば、恰も種々の藥を調合して部類を區別するが如くなれば部意を明すなり、判釋の中には判の方なり、化法の四教は界内界外利鈍の機に對して法の道理を示し是を修証せしむる教なれば、恰も藥の性分を知りて病に應じて藥をあてがふ様あれば教意を明すあり、故に判釋の中には釋の方なり。次に五味に五時を對するに二意あり。

一に約教相生の邊にては五味の相生次第を取て五時説法の順序を趁て進むに譬へ、二に約機濃淡の邊にては五味の淡より濃に進を取て一類の聲聞の五番の薰陶を經る機根の調熟淺深に譬ふるあり

第一章 五時判の概要

五時とは釋迦一代の説法を且らく年月の上より堅に五分し、釋尊今番出世の當機たる最鈍根の二乘をして次第に調熟し、終に佛道を成せしむるに至る一期調熟の化意を彰すにあり。

### 第一節 前四時の大綱

第一華嚴の時釋尊成道して最初三七の間寂滅道

塲の菩提樹下金剛座上に在して別圓頓大の機なる法慧功德林金剛幢金剛藏の四大菩薩を初め四十一位の法身の菩薩並に宿世に根熟せる天龍八部等の大機の爲に佛盧舍那報身を現して圓滿修多羅を説き玉ふ。是即ち華嚴大乘經あり、之を頓教と云ふ。而して其所被の機根は同じく界外の大機なりと雖も利鈍の二類あり、隨て能被の教に於ても圓教が正意なりと雖も、別教をも説けば未だ機を兼ねることを免るゝ能はず、故に部に約して頓とかし、教に約して兼と名くるなり。

此華嚴經に明す所の三照の譬の中には、佛出世して最初華嚴を説く義を日の初て出て先づ第一番に高山を照すに例へたり。日を佛に喩へ高山を頓大の機に光を説教に喩ふるなり、又涅槃經に明す五味の例の中には是の華嚴の時を例ふるに二義あり一には佛最初に華嚴を説く義を初めて牛より乳を出すに例へ、二には大乘を以て小機と擬宜するに小乗の機一向に未熟なる是を乳味の牛より出たばかりにて未だ練らざるに喩ふ、是は佛が最初長行

授記孤起無間自說因緣譬喩本事本生方廣未曾有論議の大乗十二部經を説くを云ふなり。

法華の信解品に云く即遣<sup>二</sup>偏人<sup>一</sup>急追將還窮子驚愕稱<sup>レ</sup>怨大喚等と云々、此は信解品に於て摩訶迦葉須菩提目蓮摩訶迦施延の四大弟子、佛の一代の化意を領する中華嚴擬宜の時を領解する文あり。

第二に鹿苑の時これより鹿苑方等樂若の三時は共に漸教なること前に述ぶるが如し、三日已後彼羅荼國鹿野苑に於て木菩提樹の下に草を以て座とかし、劣應身を示し陳如等の五人の爲めに生滅の四諦十二因緣事の六度等の法門を説き玉ひしを始として、十二年間五天竺中行化の説を云ふ、所説の教は阿舍經なり、藏教に屬す、若し華嚴三照の中には次照幽谷なり、此は丁度華嚴の次鹿苑小乗を説くに例ふるなり、四教の機の中三藏最も下劣ある故に是を幽谷に例ふ、又涅槃五味の中には酪味あり、乳味より酪味を生ずるが故に華嚴の次に説く所の鹿苑を酪味に例ふ、此は華嚴大乘十二部經より長行重頌孤起因緣譬喩本事本生未曾有論議

の九部の修羅を出すなり、故に法華の信解品に云く而以三方便ニ密遣二下人形色憔悴無威德者汝可三詣レ彼徐語ニ窮子ニ雇レ汝除レ糞等此は四大聲聞鹿苑の時を領解する文にして、誘引の状況を述成せるなり、鹿苑の前の華嚴の座には三乗の根性益なかりしが故に、大を寢て小を施して小機に小果を証せしむれば漸の初なり。然して小乘三乗は是の三藏の法門を至極の法なりと思惟せり。

第三方等の時二乗己に鹿苑に於て小果を得て同入法性の思をなし、灰身滅智して無餘涅槃に入るを至極と思惟し居れば、佛に於て三藏教を折挫して通別圓の三教を稱歎し、前三教の淺劣を破し、圓教の深勝を褒美して二乗をして恥小慕大せしめし教が即ち方等教あり、此教を對教と名る義は二乗の小果を至極と念ずれば、佛其念を破らん爲め廣く四教を説くに藏教半字の教に對比して通別圓三教の滿字の教を説く、故に對教と云ふ。(この並對の義の外相對々破等の義あれども略す)

若し華嚴三照の中には次照平地に例ふ、其中の

食時とて今の八時々分に當るなり、是則ち廣く四教の機の爲に四教を説くが故に、日の徧く一切の平地を照すに例ふるなり。又涅槃五味の例の中には生酏味なり酪味より生酏味を出す、此は鹿苑小乗の次ぎに方等教を説くの義あり。

法華の信解品に云く、過レ是己後心相体信入出無レ難然其所止猶在ニ本處ニ等云々 此は鹿苑施小の後方等を説く二乗を彈詞すれども鹿苑にて己に小果を得て居る故に二乘大乘の勝れたる法を慕ひ、小乗の劣れるを恥ぢて大教を信じ心のすなを成るを云ふなり。

第四槃若の時前方等の中に於て、二乘恥小慕大の念を生ずと雖も、而も大小各別ありと思惟するが故に、今槃若の時に於ては後三教を説いて一切の法皆摩訶衍大乘ありと説くなり。橫入の機ありと雖も殊更に藏教を説かずして小益を得せしめ、堅入の機には圓教を正意として常に通別の二教を挾帶して説くなり。

諸部の槃若教の中には佛多く身子空生等の聲聞

に命じて佛の加被力に依て佛の代りに大乘の法を菩薩の爲に説かしむるなり。故に轉教付財と云ふ佛聲聞に説かしむるは、二乗をして大乘の法に通達せしめんが爲あり。然れども二乗自らは大乘の法門は菩薩の所修にして我等二乗の修すべきものに非ずと思へり。又槃若にては小乘の法門も大乘の法門も一切の法皆摩訶大乘と説いて但法に大小別なきを顯す、故に槃若は法を開會して未だ人を開會せざるあり。

若し華嚴三照の例の中には次照平地の攝あり。食時の次の偶中とて丁度十時頃に當れり、故にまだ物に蔭の出来る時分なり、又涅槃五味の中には熟酢味に例ふ。即ち大を信する生酢味より大に通ずる熟酢味を出すなり、これ方等の後摩訶槃若を説き出すとあり。

法華の信解品に云く、是時長者有疾自知將死不<sub>レ</sub>久語<sub>二</sub>窮子<sub>一</sub>言我今多有<sub>二</sub>金銀珍寶<sub>一</sub>倉庫盈溢其中多少所應取與云々。

是の文に於て四大聲聞よく轉教付財融通淘汰て

ふ槃若の部意を領解せり。

以上鹿苑方等槃若の三時は漸次に淺きより深きに至らしむれば華嚴頓大に對して總じて漸教と名くるあり。

## 論相承與付囑關係

佐藤 秀 温

天 總 論

宗教とは宇宙絶對の眞理を開出し、而して十界の中央たる人間界を根本とし、一種崇高偉大にして吾人をして敬畏すべき感情を起さしめて、人心の奥底を支配し、之を人格化して信仰し、人生の缺陷を補はんとするものにして、往ては國家安泰の基礎を立て、又世界文明の本源とも稱すべきものは也。而して宗教には多種ありと雖も、佛教を除くの外は皆な外典外道あり。其の外道の所詮は内道に入る即ち最要なり。或る外道の云く、千年已後佛出世す等云々。又或る外道の云く、百年已